

氏 名	まきのくにあき 牧 野 邦 昭
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 339 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	経 済 学 研 究 科 経 済 シ ス テ ム 分 析 専 攻
学 位 論 文 題 目	戦間期日本の「国民経済学」の系譜 ——『貧乏物語』を起点として——

論文調査委員	(主 査) 教 授 八 木 紀 一 郎	教 授 根 井 雅 弘	教 授 田 中 秀 夫
--------	------------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は河上肇の『貧乏物語』が出現して以降の日本の経済学者の動向を戦時期の経済思想にいたるまでフォローしたものである。そのさい、欧米に比べた日本の「劣位性」の克服をめざした「国民経済学」の系譜としてそれを解釈したことがその特徴である。

出発点を示す第Ⅰ部では、河上肇の『貧乏物語』と高橋亀吉の「プチ・帝国主義論」が「劣位性」の克服をめざした経済思想として論じられているが、それに対して難波田春夫の「日本経済学」を「劣位性」を積極的に肯定した経済思想として位置づけている。

第1章でとりあげられている河上肇の『貧乏物語』は、一般に英国などの海外文明国の貧困問題を取りあげて富者による奢侈の自発的抑制という道徳的な解決を推薦した著作とみなされているが、学位請求者の理解では、河上はモラリストである以上にナショナリストである。奢侈の抑制という解決法は、生産的資本の蓄積の増進のための政策として選択されているのである。

第2章で論じられている高橋亀吉においても、資本の無駄遣いを廃止し、資本の効率的利用による「精工業」の発達を望んだのであり、それが彼の奢侈への執拗な批判や無産運動への関与、さらには金解禁時の主張の背後にあった。

第Ⅱ部は戦時期の経済思想を取りあげ、日本経済の革新に賛同した柴田敬、計画経済に反対した山本勝市、「純粹経済学・政治経済学・近代経済学」、そして戦時期の高橋亀吉が論じられる。山本勝市論には補論として戦前期日本での社会主義経済計算論が付され、「純粹経済学・政治経済学・近代経済学」を論じた章には大熊信行論が補論として付されている。

第3章の柴田敬論においては、戦前期において一般均衡理論とケインズ一般理論を理解しえた理論家であった柴田がなぜ国家主義的な「経済革新案」の提唱者となったかを、資本主義の独占化によって期待利潤率が低下するという柴田のアイデアを軸に説明している。

第4章で登場する山本勝市は河上の弟子であったが社会主義経済計算論争に先駆的に注目し、経済資源の合理的利用は価格メカニズムを通じてしか実現しないことの認識に至り、マルクス主義だけでなく経済革新論への経済的自由主義の立場からする執拗な批判者となった。しかし、学位請求者はこの河上の離反した弟子も、その本質は河上と共通するナショナリストであったと考えている。

「純粹経済学・政治経済学・近代経済学」の第5章は、戦時期において経済学における論争がそのままイデオロギー論争に化した状態の経済学界を論じたものである。河上肇の文章をつうじてラスキンを知り、その影響を受けた大熊信行の「政治経済学」は、その補論で、「国家のパターナリズム」による資源配分論として理解されている。

第6章では高橋亀吉が再登場しているが、戦時期においては経済統制やブロック経済も認めてリアリズムの立場にたって日本の経済力の拡充をはかろうとしたと論じている。

最後に、この学位請求論文でとりあげられた経済学者たちの志向を、「理想との劣位」「現実の欧米との劣位」という2つ

の軸から整理し、戦前・戦時期において現れた「国民経済学」的な志向のいくつかのパターンが戦後の経済論争の理解にとっても有益であることを示唆して、論文を結んでいる。

論文審査の結果の要旨

近年、日本近代の経済思想史および日本経済学史の研究が盛んになってきているが、戦時期およびブレ戦時期の経済思想は、その研究対象から外されることが多かった。というのは、この時期に発言した経済学者は、マルクス経済学者であれば「転向者」あるいは「偽装転向者」、ノンマルクシアン経済学者であれば、非科学的な「時局迎合者」のレッテルが貼られていたからである。

本論文は河上肇の『貧乏物語』以降の日本の経済学者の経済思想を、「理想」あるいは「現実の欧米」に比べた「劣位」の克服に向かう「国民経済学」と捉える。その上で、この「国民経済学」の様々なタイプが戦時期の経済思想にまでつながるとみることによって、上記の空白を埋めることを試みた研究である。

本論文の第1の価値は、時局政治に迎合的に見えたがゆえに戦後には非科学的とみなされていた著作も含めて、徹底した文献渉猟の上で執筆されていることにある。この研究態度がもっとも役立っているのは、戦後期にまで尾を引いている戦時期における「純粋経済学」と「政治経済学」の対立の実態とそれが帯びたイデオロギー論争的な性質を論じた第5章である。また、第3章でとりあげられている柴田敬の「日本経済改革新案」や、第4章でとりあげられている山本勝市の計画経済批判論の再評価の中でもそれが生きている。また、本論文の中では、補論として副次的な地位に置かれている難波田春夫論や大熊信行論も、すでに公表されていて、しっかりとした文献的基礎に立つ業績としての評価を得ている。

本論文の第2の価値は、従来の日本経済学史研究において、明治期から大正期にいたる西洋経済学の輸入のなかに位置けられていた「国民経済学」の系譜を第一次大戦後から戦時期にいたるまでの時期に延長し、それとともにいくつかの意義のある新解釈を提示したことである。この新解釈は、第Ⅰ部でとりあげられている河上肇『貧乏物語』と高橋亀吉の「プチ・帝国主義」の理解の仕方に現れているが、第Ⅱ部で取り上げられている柴田敬や山本勝市の理解の仕方にも新味を与えている。

第3に、本論文は、河上の『貧乏物語』の解釈にあたって開発経済学的モデルを構築し、また柴田敬の立論についても難解な『理論経済学』を読み解いてモデル化するなどの、一定の理論的準備を基礎にしている。それによって、本論文は単なる記述的・情報収集型の日本経済学史研究の域を脱している。

しかし、問題点がないわけではない。たとえば、利己心・利他心問題にはじまるモラル論あるいは心情論の側面は本論文の河上論からは脱落している。したがって、河上肇の全体的理解を求める立場からは、本論文の河上論は、鋭利ではあるが一面的であると評される可能性があるだろう。

また本論文では、とりあげられる経済学者のほとんどが、タイプの相違にもかかわらず、みな「国民経済学」の系譜に属すると考えられている、また、このグループに明らかに対立する経済思想あるいは経済学者が示されていない。そのため、本論文における「国民経済学」の外延は、やや茫洋としている。

本論文の「国民経済学」的視点に河上以上に適合しているのは高橋亀吉の方であろう。本論文は、無産運動にも関与していた「プチ・帝国主義」論の時期の高橋と戦時期にブロック経済・統制経済を前提してリアリズムにもとづいた経済論を展開した高橋とを第Ⅰ部と第Ⅱ部にわけて論じている。戦時期の高橋論については、そのナショナリスト的視点の限界も指摘されている。この限界をさらに掘り下げるならば、本論文の深みはさらに増したことであろう。

上記のような問題点が残るものの、近代日本経済学史の領域を拡大し多くの新知見をもたらした本論文の価値を損なうものではない。

なお、平成20年2月20日に公開審査会を開催し、論文内容にかかわる問題につき質疑応答をおこない、その結果、合格と認めた。